る模型にはちゃんと表現されていました。とはいえ、こんなことも『東京城』を読んでいただけではけっしてわからないこと。あらためて現地で実物に接することの重要さを感じた次第です。

（文化遺産研究部　小野健吉）

研究室紹介

飛鳥藤原宮跡発掘調査部　考古第一調査室

飛鳥藤原宮跡発掘調査部には考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室、史料調査室が置かれています。考古第一調査室は土器等の遺物の調査研究を担当し、考古第二調査室は瓦・金属器・木器等の遺物を扱うと定められています。しかし当調査部は平城宮跡発掘調査部より組織が小さく、発掘調査で出土する多様で膨大な量の遺物の整理には、組織図どおりの分業では不適合な部分があります。そのため、遺物については瓦・土器・木器（瓦と土器以外を扱う）の３つの整理班を編成して作業を進めています。考古第一調査室の対象とされている土器類は、土器整理班を中心に整理・分析・研究をおこなっています。

日常的な作業は、現場から運ばれてくる土器の水洗、分類、破片の接合と復原、実測、データ処理などの基本作業が中心です。現在は主に吉備池廃寺と飛鳥池遺跡の報告書刊行にむけて、整理作業や実測図作成などをおこなっており、いそがしい毎日が続いています。

飛鳥藤原地域は、７世紀の約１世紀のあいだ日本の都でした。この地域から出土する様々な遺物は、律令国家の成立過程を明らかにしていく重要な資料です。土器もそのうちの主要なものの一つで、どんな遺跡でも必ず出てくる普遍的な遺物です。土師器・須恵器を中心として、７世紀にこの地域で使われた土器の様相を明らかにしていくことが研究課題です。土器の編年や作られた産地の問題など、課題はたくさんあります。また宮都で使われていた土器という性格から、全国各地の同時代の土器研究への関わりは大きいと考えられます。７世紀の土器様相の基本的な変遷についてはこれまでにも『学報』などで公表してきましたが、今後さらに詳細な研究成果をあげていくよう努力しているところです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　安田龍太郎）

平城宮跡第一次大極殿復原工事

第一次大極殿正殿復原工事は、2001年度までに、大極殿基壇基礎造成（1,795㎡）、木材の調達、基壇化粧石材の調達、工事用地の仮設盛土（53,150㎡）、仮囲いおよび進入口の設置、木材保管庫（1,505㎡）・木材加工場（1,505㎡）・加工原寸場（2,005㎡）・一般公開施設（720㎡）などの仮設物の建設等が発注されています。

大極殿基壇は鉄筋コンクリート躯体に凝灰岩切石の貼り付けを行うもので、平城宮跡でも出土している兵庫県高砂市宝殿産の黄色凝灰岩「黄竜山石（キタツヤマイシ）」を使用します。また、基壇基礎に使用するコンクリートは、乾燥収縮低減剤を添加した通称「五百年コンクリート」を使用しています。

2002年度は、大極殿基壇基礎内に免震装置の設置工事および木材調達、柱礎石の据え付けなどが契約されており、近く素屋根建設工事の発注が予定されています。また、９月から、基壇の化粧石材の加工貼り付けが始まりました。

（平城宮跡発掘調査部　渡邉康史）

大極殿基壇の地覆石

博物館学実習生の受け入れ

一昨年度からおこなっている博物館学実習生の受け入れも３年目をむかえました。今年度は９月２日から６日までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。実習生は帝塚山大学から６名、奈良女子大学から２名、京都橘女子大学、東京農業大学、専修大学、徳島文理大学、大阪明浄大学から各１名の計13名と、昨年度の８名に比べるとかなり増加しています。また、学生の専門も文化財だけではなく、日本文化や造園というように多岐にわたっています。

博物館学実習風景

飛鳥資料館が博物館学実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されてきたのでしょう。

実習は、展示の実際（構成から展示まで、展示品の借用）、展示解説の実際、博物館と建築史、博物館展示の新傾向、博物館のＩＴ化、新しい博物館学構築に向けて、と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品の借用」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

今年度の博物館学実習が、実習生にとって有益なものとなったことを期待します。

（飛鳥資料館　西山和宏）

飛鳥資料館　秋期特別展示『A0の記憶－文化財建造物保存図－』

今年度、飛鳥資料館の秋期特別展は、「Ａ０（エーゼロ）の記憶－文化財建造物保存図－」と題して2002年10月８日から12月１日の会期で開催いたします。また、この展覧会に伴って文化遺産研究部建造物研究室長の清水真一による特別講演会「建造物保護の歩みと修理記録等の保存」を10月12日、午後２時から当館講堂にておこないます。

文化財建造物は、建立からの長い年月、所有者の尽力によって保護されてきました。明治30年に古社寺保存法が成立し、国の事業として文化財建造物

群馬県、妙義神社本殿・拝殿・幣殿、側面図

の修理工事がはじまります。こうした修理工事ごとに、綿密な調査がおこなわれ、修理工事報告書とA0版の大きなケント紙に烏口（からすぐち）や面相筆（めんそうふで）を用いて墨入れした、保存図と呼ばれる図面が作成されます。修理技術者によって永年保存を目的に作成された保存図は、そのずべてが古建築の正確な記録ということだけにとどまらず、図面作品として美術的な側面さえも伴う、貴重な資料となっています。今回の特展では、ほとんど人目のふれることのない保存図を中心に、明治時代から現在に至るまでの修理工事の歴史をテーマとする展示を企画いたしました。

また、修理の際には、腐朽などによりやむを得ず部材が取り替えられることがありますが、取り外された古材には、時代の特性を示すものや、銘文を残すものも含まれ、建物と同様の価値を有するものもあります。今回、昭和19年の焼失から現在まで大切に保存されてきた法輪寺三重塔の焼損部材を、古建築への理解を深める資料として、展示したいと考えております。

（飛鳥資料館　西山和宏）

佐原　真　元埋蔵文化財センター長逝く

「おはよう佐原です。ちょっと、教えて欲しいのだけど」

佐原コールで知られた佐原真氏が、７月10日朝逝去された。７月20日のお別れ会には、１千人以上の人々が訪れたという。

昭和39年入所の「花の三九組」として、長く研究所に勤務・活躍された佐原氏の業績について、改めて申し上げる必要もないでしょう。考古ボーイとして出発した佐原氏が、縄文時代を手始めにさまざまな分野に領域を広げ、考古学者として大成されことは異論がないところ。その活動の源はご自身の努